

# 研究

## 枕草子人物考証

——平生昌について——

追 徹 朗

枕草子の「大進生昌が家に」の段で、その文章生出身らしい、あるいは田舎者のな言動を清少納言から嘲笑された平生昌の家庭環境及び政治的行動については、萩谷朴氏のすぐれた論考がある（雑誌「国文学」昭和38年8月号所収）。本稿はそれとの重複を避けながら、従来あまり取上げられなかつた生昌の経歴や家族関係の一面を探つてみたい。

生昌は尊卑分脈や三卷本枕草子勲物によれば、贈三位平珍材の二男で、従二位中納言惟仲の弟。文章生、六位藏人を経て長保元年八月九日に中宮定子が自邸に行啓された時は、中宮前大進前但馬守であつた。後に正四位下播磨守に至つてゐる。なお、彼の子には正五位下安芸守で千載集歌人の雅康と、文章生を経て従五位上齋院長官となつた以康がいた。

以上の点を当時の記録類その他で敷衍すると、まず長徳

2108当時中宮大進（小右記）、長徳41229には「但馬守生昌申重任文」（伏見宮御記録）を提出しているから、それまで但馬守であつたことが知られる。それが前記の如く長保189には前大進前但馬守であるから、中宮大進にも但馬守にも再任しなかつたと考えられる。そのような浪人暮しの後、長保4119に除目の直物によつて備中介（権記には介とあるが、御堂関白記寛弘1115の条には備中守とある）となり、ついで寛弘634に播磨守（権記）に任じられた。寛弘9年以後その名は記録類に見えないし、播磨守が極官のようであるから、おそらく長和1年前後に没したものであろう。日本紀略の長和51210の条に「故播磨守平生昌宅焼亡」とあるので、それ以前の死であることは動かない。

ところで問題なのは新訂増補国史大系の尊卑分脈の頭注に「按前田本系図惟仲子」とあることである。生昌が兄の惟仲に比して官位が遙かに劣るのは、彼ができの悪い弟であつたからとも考えられるが、あるいは子供であつたからかもしれない。師輔流以外の藤原氏はもちろん、他氏にあつても、父・子・孫の順に地位が下るのは当時普通の現象である。弟であつたか子であつたか、その点の実否を決する資料は現在のところ見当たらないが、枕草子に描かれた彼の惟仲に対する尊敬の仕様、惟仲の太宰府における死を報じたのが彼であること、また後述する彼の子達の年令など

から、惟仲子説は捨てがたい。

さて、もし彼が惟仲の子であるとすれば、尊卑分脈によれば彼には二人の兄弟と一人の妹があることになる。まず、道行が惟仲の子であることは、小右記と公卿補任の正暦4・11・12の条によつて明白であるが、彼は正暦1・10・5に中宮権大進（小右記）となり、同4・11・12には従五位下に叙せられた。また御堂関白記によれば長和2・4・19に隨身故録十二具と移十具を道長に献じている。この道行の娘は高階業敏に嫁して業仲を生んだが、業仲は後に藤原実範の養子になつた。又この記事によれば道行の極官は伯耆守であつたようである。

次にもう一人の兄弟である忠貞は尊卑分脈によれば文徳源氏の流れて正暦1・12・9當時式部大丞（権記）であつた源致治の子で、六位藏人を経て因幡守となつたが、その間に惟仲の養子となり姓を改めている。なお養子になつた事情は不明である。妹は大和又は大和宣旨と呼ばれ、勅撰作者部類によれば、「三条院太皇太后宮（妍子）女房。中納言惟仲女。大和守（源）義忠為妻之故号大和。」とあり、後拾遺歌人である。

次に生昌の子は前述した雅康と以康のほかに、僧となつた真範がいる。まず雅康は勅撰作者部類にも「五位安木守。播磨守平生昌男。至永承。」とあり、惟仲の実子であること疑いない。（とすれば、「康」の字を共有する以康

も生昌の子ということになると思う。）彼は寛弘3・2・8に文章生として東宮の昇殿を許され（御堂関白記）勘解由判官を経て寛弘8・8・11に六位藏人となつた（小右記）。當時、六位藏人の任期は普通四年くらいであるが、その間に親を失つたことが千載集に見える。その親は異文に母とあるが、おそらく生昌ではなからうか。

次に以康は左経記によれば寛仁1・8・23頃六位の藏人であつた。藏人になるのが雅康よりやや遅れたのは弟であつたからであろう。以康には尊卑分脈に見える昌綱及び藤原資国の養子となつた国仲のほかに、興福寺三綱補任や同寺略年代記によれば別当権僧正になつた公範がいる。彼は齋院長官平以康息とあり、応徳3・10・19に七十八才で寂しているので、逆算すると誕生は寛弘6年である。

さて、生昌の子で僧となつた真範（甥の公範が興福寺に入つたのも、またその法名も真範によつたものであろう。）は興福寺略年代記・同寺三綱補任・同寺寺務次第・諸門跡譜によると播磨守平生昌の男とあるが、恒徳公為光の子という名目で興福寺に入り、後に別当大僧正まで上つて天喜2・12・5に六十九才で寂した。逆算すれば寛和2年の生まれである。なお恒徳公為光は正暦3年に薨じているので7才までに興福寺に入つたと思われる。

当時貴族の子弟で僧となつたのは、山門堂舎記によれば、第一子の場合が多かつたようである。

# 伊勢大輔考

荒川 弘子

## 序

伊勢大輔は平安中期の女流歌人である。彼女は上東門院が中宮の時、初宮仕し、その時詠じた歌（家集5）で、一躍歌才を認められ、宮仕生活の華々しいスタートをきつたのである。

彼女の家系をみるに一門には歌人として世に輩出したものが多い。このような一門に育つた伊勢大輔はどのような一生を送つたのであろうか。平安朝の女流歌人の多くがそうであるように、生没未詳とされている伊勢大輔について、家集（群書類従所収の伊勢大輔集を底本とする。歌の番号は）群書類従本の配列順に番号を付したものを使用することを中心に、系図、その他の資料より考察していくことにする。

### (一) 伊勢大輔の家系

#### (1) 一門歌人

伊勢大輔の近親者には歌人として世に知られているもの  
 がかなりおり 袋草紙遺編 撰者故実 の条に「頼基・能宣・輔親・伊勢大  
 輔・伯母・安芸君六代相伝之歌人」と記されている。この他  
 和歌色葉 名譽歌仙 に選ばれた伊勢大輔の娘の筑前乳母、源兼俊母、  
 甥重経、姪少将内侍、孫通宗通俊なども歌人としてみえて

人物	誕生時の父の年令	出家時の年令
道命	道綱二十才	十五才
如源	公季十八才	十六才
尋円	義懐十七才	十四才
寂円	頼忠三十三才	二十一才
尋光	為光二十一才	十五才

右の例のように真範が生昌二十才頃に生まれた長男であれば、生昌は惟仲の二十四才頃の子となり、また公範が以康二十才の頃の子であれば以康は生昌の二十四才頃の子となり、なお、同じ中宮大進となつたのが道行は正暦年間、生昌は次の長徳年間であるのも、生昌が道行の弟であるからと考えられ、好都合であるが、あくまでも仮説にすぎない。

最後に生昌に娘がいたという記録はないが、権記によれば彼は長保1021頃五節を献じている。普通五節舞姫は公卿や受領の娘を宛てるので、その頃十代であつた娘がいたのではなからうか。紫式部日記に見える平惟仲の養女「五節の弁」がそれであれば面白いが。

昭和40・7・7